

令和元年6月13日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21209

研究課題名(和文) フランス演劇における近代演出の確立と俳優訓練術の発展 俳優特有の身体概念の形成

研究課題名(英文) The Establishment of modern "mise en scene" and the development of actor training : configuration of the concept of acting body

研究代表者

中筋 朋 (Nakasuji, Tomo)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：70749986

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀末フランスにおける演劇理論とその背景を整理することにより、俳優観の変化と演技論における身体的位置を論じるための基礎をつくることと、生理学の検討を補助線として、19世紀後半に誕生した芸術流派やあらたなジャンルに通底する問題系を抽出することを目的として、以下の研究をおこなった。(1)サン=ポール=ルーにおけるイデオリアリズムと現代演劇の共通点の解明(2)日本演劇における「型」とヨーロッパ演劇における脱演劇化/再演劇化問題の検討(3)ラシルドの「脳の劇」がもつ意義の検討

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究期間内にさかんになってきた19世紀フランス哲学の研究において、刊行された哲学書だけでなく文化現象や芸術理論は大きな意味をもっている。これに寄与し、演劇において身体から心へのアプローチがはじまった時期における身体と心との関係を問う基礎ができた意義は大きい。また、19世紀末は科学が生活を大きく変えた時期という点で、ARやVR、さらにはIOB(Internet of Bodies)が大きく生活を変えつつある現代の状況と呼応している。この時期に芸術が科学に対して、科学が芸術に対してどのような想像力を発揮したのかを検討することは、現代における芸術の意義を問うことにも結びついている。

研究成果の概要(英文)： This research aims to lay the foundation for the clarification of the relation between the development in the physiology and the mutating position of the actor's body in theatrical theory and practice in the 19th century French theatre. From this point of view, following researches were done : (1) investigation of points in common between the Saint-Pol-Roux's ideorealisme and the staging concept in European contemporary theatre ; (2) examination of the "kata" in Japanese theatre and de-theatricalisation-retheatricalisation in european theatre in the 19th centry ; (3) study on the "cerebral drama" by Rachilde and the sense of wonder.

研究分野：フランス演劇

キーワード：フランス演劇 近代演出 俳優訓練術

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

19世紀末の演劇がヨーロッパ現代演劇を考えるうえで大きな転換点となっているのは、この時期に近代演出が成立したためである。しかしこれまで、この時代の演劇については、戯曲研究にとどまる傾向があった。同時期の劇作術の変容については、ドイツの美学者 P・シオンディが「ドラマの危機」として理論化している(『近代戯曲論』、1956年)が、これと対になるような「舞台の変容」についての研究はいまだおこなわれていないのである。2009年に、ようやく論文集(M・コンソリーニ、J=P・サラザック(編)、『演出の誕生/ドラマの危機』)が刊行されたことによって関心も高まっており、専門研究が待たれている。研究代表者の著作『フランス演劇にみるボディワークの萌芽』(2015年)はこうした先行研究の欠落を埋めようとしたものだが、演出家の登場による演技、ひいては俳優訓練術の変容を明らかにするためには、19世紀末ヨーロッパという時代の特異性を考慮にいれ、科学的・思想的言説についても検討しなければならない。というも、神経生理学や実験音声学などの発展により、感覚と知性、身体と精神、あるいは魂についての概念は、当時大きな転換点を迎えており、これを理解するためには当時の芸術や芸術理論を検討することが必要であり、また当時の芸術や芸術理論を理解するためには科学的・思想的言説の検討が不可欠だからである。実際、研究開始当初は科学的言説と芸術の関わりについては関心が高まりはじめたところであり、論文集『近代科学と芸術創造 19~20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』(真野倫平編、2015年)なども出版されたばかりであった。19世紀末は、科学の発展によって世界の見方が大きく変化した時期であるという共通理解のもと、映像と科学的言説との関わりについての研究や、ヒステリーと装飾芸術の関係の研究などもおこなわれている。そして、演劇が人間の行動と内面について扱い、それを人間という表現媒体によって直接的に(人間の現前によって成り立つ芸術は、現代美術の例を除外するとすれば、伝統的には演劇のみである)表現する芸術であることから、このような視点のもとに演劇理論を再考することは当然必要なことであると同時に非常に有益であると考え、研究に着手した。

2. 研究の目的

(1) 19世紀末フランスにおける演劇理論とその背景を整理することにより、俳優観の変化と演技論における身体の位置を論じるための基礎をつくること。

(2) 生理学の検討を補助線として、19世紀後半に誕生した芸術流派やあらたなジャンルに通底する問題系を抽出すること。

3. 研究の方法

(1) 19世紀末の演劇理論の整理をおこなう。この時代の演劇理論は、小雑誌の流行もあり、さまざまな雑誌にばらばらに収録されており、それをまとめたアンソロジーは、フランスにおいても翻訳されていない。この一覧を作成して、当時の演劇理論の交通整理をおこなう。また、演劇においては、自然主義と象徴主義がほぼ同時進行で舞台に取り組んだ経緯があり、演劇人のなかには、文学においては対立している両者とも影響を受けたものも多い。整理をおこなう過程で、この両者の関わりに注目することにより、各流派にとどまらない共通分母を探究する。

(2) この時代は、西洋文明の相対化がおこなわれはじめ、異国趣味にとどまらない東洋の思想的影響が見られはじめる時期でもある。このタイミングで、演技における身体の役割が変化したことは興味深い。西洋と東洋の演技における身体の捉え方の比較をおこなうことで、19世紀末フランスにおける俳優観の変化について新たな視点をもたらす。

(3) 戯曲において登場人物の内面の捉え方が変化したこと、またそれと軌を一にして俳優の演技に求められるものが変化したことには、19世紀を通して生理学が飛躍的に進展し、「精神生理学」なるあらたな学問が希求されたことの理解なしには抽出できない意味がある。しかしながら、この時期の精神生理学が求めたことについての理論的検証はまだ充分におこなわれているとは言えない。そこで、医学を修めた詩人として、この精神生理学の必要性を主張したりトレ的思想を検討する。

(4) 以上のような背景をもとに、象徴主義演劇のなかに現れた「脳の劇」を検討することによって、19世紀末において登場人物の知覚と身体がいかに捉えられ、演劇という形式において具現化されようとしていたかを検討する。

4. 研究成果

(1) 19世紀の演劇論を検討するなかで、これまで演劇の文脈においてはほとんど検討されてこなかったサン=ポール=ルーのイデオリアリズム論に注目した。イデオリアリズムとリアリズムを

結びつけるようにするこの考えは、ばらばらに見える各々の演劇理論をつなぐ導きの糸となりうる。これはまた、研究代表者がめざす現代演劇の源流を19世紀末の演劇に探るためにも必要不可欠な研究である。この研究については、論文を2本刊行した。まず、『フランス語フランス文学研究』に発表した「サン＝ポール＝ルーと19世紀末フランス演劇　ダニエル・ハーコランド作『個人からなる登場人物たち』を巡って」であり、次に『ステラ』に発表した「サン＝ポール＝ルーの芸術論と演劇の関わり　イデオレアリズム登場の文脈から」である。この研究により、一般的なイデオレアリズムとサン＝ポール＝ルーのイデオレアリズムの差異を明らかにし、象徴主義演劇が現代演劇に対して及ぼしている影響について解明する端緒とした。前者の論文は、サン＝ポール＝ルーの戯曲に分析をおこなったあとにさらにそれを演劇論として読むことにより、象徴主義演劇の美学と現代的な演出とが繋がっていることを解明したものである。演劇研究者の手で分析されることのほとんどなかったテキストを、このように実践的なコンセプトを含んだものとして読み解くことができた意義は大きく、また、今後の研究においてはこのような読みが要請される（研究成果の（3）を参照）ため、今回の課題をより発展的研究に結びつけていくときの重要な方法論が形成されたとも言える。後者の論文においては、象徴主義演劇と現代演劇をつなぐ「総合」というキーワードを抽出し、分析することができた。

（2）19世紀末の演技論を考えるうえで重要な西洋と東洋の演技論の交錯の問題についての論文を発表した。19世紀末になり演技の身体の次元が取り入れられはじめたフランスの当時の状況と、身体の「芸」のなかに自然な演技と言葉とが急速に導入された19世紀末の日本の状況は、演技論の変容を考えるうえでどちらも興味深く、裏表の関係ゆえに示唆に富んでいる。このような状況は現在にもあてはまる。このことを明らかにするため、研究代表者は、日本演劇学会を「演技術からみる身体」というテーマで愛媛大学において開催し、フランスの俳優・演出家のディディエ・ガラス氏と日本とヨーロッパで活躍する奥野晃士氏を招いて、ともに講演をおこなってもらうとともに、日仏の演技論の関連・相違についてのトークを企画した。ガラス氏には、大学で講演会もおこなった。申請段階で企画していたディディエ・ガラス氏によるフランスの伝統的俳優教育と現代演劇の関わりについて、学会および大学での講演として実現できたことは大きい。また、日本の俳優であり、日本の演技法をヨーロッパで伝えておられる奥野晃士氏もともに招待し、二人の対話という機会を設けることにより、文化的背景の異なる日本とフランスにおいても共通する部分があることが明らかになり、非常に刺激的な議論の場を創り出すことができた。研究代表者は、前述の論文において近代演出の黎明期である19世紀末ヨーロッパと、西洋演劇を「輸入」したばかりの19世紀末の日本において、俳優論において共通する部分があることを明らかにしたところであり、このような平行的現象を19世紀末と現代ともに見いだせたことは、演技論と文化上の変化の平行現象を辿るうえで大きな収穫であった。さらに別の時期に、ボイストレーナーの大場浩子氏を招聘して、身体からみる声についての講演をおこなっていただいた。氏もヨーロッパと日本ともに活動を重ねられており、演技論における西洋と東洋の交錯について貴重な示唆をいただいた。

（3）これまで網羅的に研究されることのなかった19世紀フランス哲学を研究する研究会の立ち上げに参加し、研究を進めてきている。研究期間中には、実証主義哲学者として知られるエミール・リトレが科学をいかに哲学として捉えようとしたかについての検討をおこなうとともに、彼がどのような「精神生理学」を必要としていたのか、その射程をどう見定めていたかを分析した。リトレの思想においては、生物学と化学の違いが意識されていることが特徴的である。これは、カルロ・ギンズブルグが展開した推論的パラダイムの議論とも密接に関係している。つまりギンズブルグは、ガリレオ以来の近代科学文明に置いて医学がいかにそのパラダイムに組み込まれない存在かということ強調しており、それが19世紀末のパラダイム転換をもたらしたと述べているが、これが医者であり詩人であったリトレによって体现されている。この検討により、文学書・思想書・科学書を他事実関係量の影響関係を越えた総合的「書物」として読む可能性がひらかれた。

（4）前項において検討したような精神の概念のゆらぎは、文学ジャンルのゆらぎとも結びついている。このことを明らかにしたのが、『ステラ』37号に発表した論文「ラシルドの『脳の劇』における幻覚をめぐる——幻想小説と科学小説のあいだで——」である。この論文において、ラシルドの脳の劇である『死の夫人』を幻想文学と科学文学の狭間にあるものとして検討することにより、19世紀現象小説の隆盛によって、またドロフの有名な定義によって可能性を狭められていたかもしれない「驚異」の感覚が、科学に対する驚異という形であらたに生まれ変わる可能性があることを明らかにした。これについては、SFの父として名の挙がるジュール・ヴェルヌの作品とも比較検討しなければならないが、ラシルド作品における幻想と科学がもつ独特の屈折関係は、科学に対する驚異の芸術を考えるうえで重要な役割を果たすことになるだろう。というのも、幻想は「現実に対する超自然の侵入」とも定義されるが、ラシルド作品において「侵入」してくるものは科学的診断だからである。共感覚の実験を劇場をつかっておこなった象徴主義演劇人たちのこのような独特の態度については、さらに発展的研究が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

中筋朋、「ラシルドの「脳の劇」における幻覚をめぐって 幻想小説と科学小説のあいだで」『ステラ』、九州大学フランス語フランス文学研究会、第37号、pp.175-192、2018年。

中筋朋、「サン＝ポール＝ルーの芸術論と演劇の関わり イデオレアリズム登場の文脈から」『ステラ』、九州大学フランス語フランス文学研究会、第35号、pp.71-83、2017年。

中筋朋、「サン＝ポール＝ルーと19世紀末フランス演劇——ダニエル・ハーコランド作『個人からなる登場人物たち』を巡って」『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第109号、pp.107-121、2016年。

〔学会発表〕(計2件)

中筋朋、「精神生理学についてのエミール・リトレの構想をめぐって」、19世紀フランス哲学研究会、2013年4月15日

中筋朋、「エミール・リトレ『哲学的視点から見た科学』をめぐって」、19世紀フランス哲学研究会、2017年3月28日

〔図書〕(計1件)

大浦康介編、『日本の文学理論』所収：中筋朋、「日本の演劇理論——近代演劇概念の成立をめぐって」、水声社、2017年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

研究代表者氏名：中筋 朋

ローマ字氏名：Tomo Nakasuji

所属研究機関名：愛媛大学

部局名：法文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：70749986

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(3)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。